



# ユニ総合計画の グリーンレポート

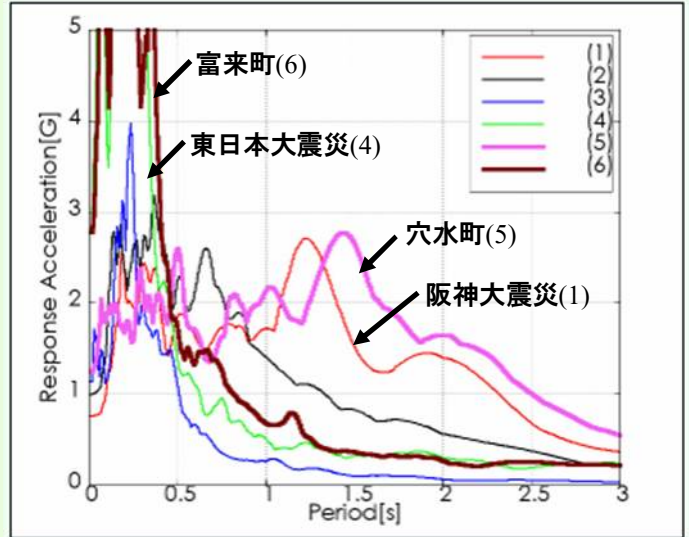
1級建築士 不動産コンサルタント 秋山英樹

157号

発行日2024年1月号

## 「能登半島地震で分かること」

今回の能登半島地震は最大震度7、M7.6で能登では最大規模でした。昨年の5月にも最大震度6強M6.5の地震がありましたが、今回の地震は1.1大きく、Mが1違うと規模は約32倍違い1.1違うため約40倍大きい地震が起きたのです。これまでも能登半島では2000年頃から、大きくはないが頻繁に「群発地震」が起きていました。



京都大学教授 境 有紀氏HPより転載

これまでの大震災で、地震波の特徴により木造建物の被害の大きさが変わることが分かっています。地震は大きく分けて周期の短い「ガタガタ」から、「ユサユサ」「ユラユラ」と揺れの周期によりどの揺れが一番多かったのかで分かります。

体感的に一番驚くのがガタガタですが、周期が1~1.5秒のユサユサが木造家屋には倒壊リスクが高まります、実際、大きな1-2秒応答が出ていた、穴水や輪島の観測点周辺では、多くの木造建物が全壊しており、一方では、震度7を記録したものの短周期が卓越して1-2秒が出ていない富来町などには大きな被害建物は少ないようでした。

この事象は震度の大きかった東日本大震災より、震度の小さい阪神大震災の方が建物被害が大きかったことで証明されています。すなわち震度が大きさにより建物被害が相関するわけではなく地震の性格により違いが出てきます。地震の性格は地震そのものだけでなく、地盤の性質により変わり、固い地盤（山手）だと「ガタガタ」軟らかい地盤（下町）だと「ユサユサ」になります。

現在の震度は、地震計とコンピュータによって「計測」されているという意味で「計測震度」と呼ばれています。計測震度は大まかに言って0.1~1秒という比較的短い周期の揺れの強さから計算されています。「ガタガタ」の周期が0.1~1秒という短周期に地震は人の感覚や室内物品の動きに対応しています。そのため震度は人が揺れが強いと思う地震は大きくなるようになっています。

